

フランス植民地期 メコン・デルタ西部の開拓

Can Tho 省 Thoi Lai 村の事例研究

高田 洋子*

Newly Born Rural Society in the Western Mekong Delta under French Domination — A Case Study of Thoi Lai Village in Vietnam —

Yoko TAKADA

In this paper an examination is made of the process of settlement of one village during the French colonial period in the Mekong Delta, based on field research done by the writer in 1997. The village contains a vast area along three canals dug in colonial times. It is an area where the system of agriculture for export-oriented rice production flourished and hence where absentee landlordism was prominent. Analyzing the results of interviews with 40 farmers, landless immigrants who settled in Thoi Lai village to clear land for landlords in colonial days, the writer reports on when and from where they came, how they grew rice and other crops, local subsystems serving for landlordism, the typical mobile society characterizing a frontier village, and what happened to farmers during and just after the Indochina war.

* たかだ・ようこ：敬愛大学国際学部助教授 ベトナム近代史

Associate professor of developing country studies, Faculty of International Studies, Keiai University; modern history of Vietnam.

はじめに

本稿は、1995年からスタートした「メコンデルタ農業開拓の史的研究」(文部省科研費国際学術研究)による1997年度ベトナム農村調査の中間報告である。本プロジェクトは、同デルタの農業開発の歴史を、村落レベルで明らかにすることを目指している。筆者のチームは97年7—8月にかけて、デルタ西部(Trans Bassac 地方)の1村落を実地調査した。同様に筆者は、96年7—8月に、デルタ中部(Ciss Bassac 地方)の海岸複合地形に分類される砂丘上の村落(Tra Vinh 省 Chau Thanh 県 Hoa Thuan ホアトゥアン村)を調査した。2つの農村は、同じメコン・デルタとはいえ全く異なる自然環境と開拓過程をもつ稲作地域であった。すなわちホアトゥアン村は砂丘上の農業に基盤を置くクメール人の古い社会であるのに対して、今回の調査村(Can Tho カントー省 O Mon 県 Thoi Lai トイライ村)は、デルタの西部氾濫原に位置するベト(キン)族の新しい開拓社会である⁽¹⁾。

メコン・デルタの農業開拓に関する先行研究には、ベトナム人、フランス人、アメリカ人、日本人によるものがあり、それぞれに特徴がある⁽²⁾。そのなかには、実地調査を踏まえたいくつかの優れた研究も見られる。しかしそのいずれもが、デルタ開発の通史的・全体史的・地方史的なもの、あるいは戦乱下での限られた地点の調査に基づくものであった。これらに対して、本プロジェクトではデルタをいくつかの特徴的な地形に区分し、代表的村落の個別調査に基づいて、それらの地域的特色を比較・総合化することを通してデルタの農業開拓史を再構成しようとしている。対象村落は、筆者らのチームが調査したトイライ村およびホアトゥアン村のほかに、別のチームによるロンアン省カインハウ村、キエンヤン省ミーラム村、そしてドンタップ省フーズック村の5村である⁽³⁾。

カントー省は、カンボジアから流れ下るメコン河の支流 Hau Giang (ハウザン) 河右岸側、ベトナム領メコン・デルタのほぼ真ん中に位置している。調査村トイライは、その省都カントー市から北西に約30km の地点に

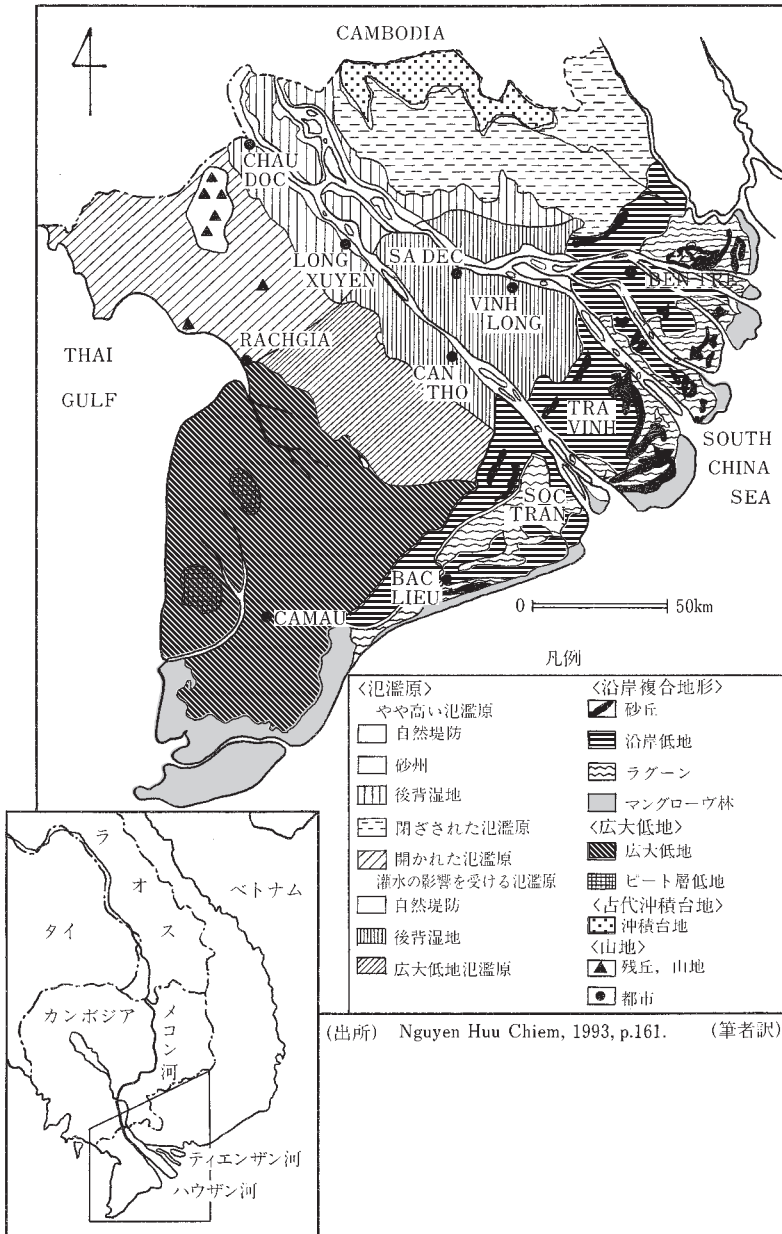
ある。自然河川や運河周辺の14集落から構成され、人口約3万人、平均的ベトナム村落としては規模の大きい村である。同村は、デルタの重要な地形区分の1つである氾濫原のなかの「広大低地氾濫原」上にある（第1図参照）。フランスの植民地支配を被る以前、その一帯は、乾季には堅く乾いた大地と、雨季にはハウザン河の増水と降雨によって1年のうち3ヵ月から半年以上も排水不能となる沼地が混在するところであった。しかし20世紀初頭には、この低湿地に運河が掘削されたことを皮切りにして、本格的な開墾が始まった。そのような運河周辺地域は、植民地経済を支える典型的な輸出米生産地帯に変貌を遂げると同時に、ベトナム人による新しい農村社会が形成された。メコン・デルタ西部の急速な開発は20世紀のベトナム史における、重要なトピックであろう⁽⁴⁾。

最近のメコン・デルタの村々では、解放後に掘削された第2級、第3級の中小水路のおかげで「緑の革命」が進行し、この10年間に農業は劇的な発展を遂げた。1990年代にはいって稲の2期もしくは3期作が達成され、米以外の換金作物栽培も始まった。トイライ村でも、掘削された大小の水路が農村の日常風景の一部となり、それなくしては人々の暮らしは成り立たない。ベトナム共和国期、あるいはフランス植民地期にさかのぼる農業のありようについて、村人の記憶はほとんど消えつつあるようだ。

しかし、広大な低地を人間の住める空間にした20世紀は、なんともいってもフランス植民地時代に始まった。筆者は、とりわけその時代の具体的な開拓過程に強く興味を惹かれる。とはいえ、植民地時代の個別村落に関する公文書類はきわめて少ない上に、長い戦乱のなかで失われたものが多い。

1998年3月に筆者は同村の補足調査を行う予定であるが、本稿では、調査村の自然的条件および生き証人の聞き取り調査の結果を分析することを通して、メコン川の水際の新開地＝運河社会が形成される過程を、暫定的ではあるが再構成することにしたい。

第1図 メコン・デルタの地形区分



1. 調査村の決定

a) Can Tho 省の3つの大運河周辺における予備調査

1997年7月27日にカントー市に到着した調査団⁽⁶⁾は、同省の複数村を訪問した後に調査村を決定した⁽⁶⁾。まず7月28日(月)午前、調査団は調査の受け入れ機関であるカントー大学に挨拶に行き、午後にはカントー省人民委員会において調査の目的と内容を説明し、協力を依頼した。

カントー川がハウザン河に出合う河口に位置するカントー市は、1876年にフランス植民地政府がカントー監察区を置いた後、同省のフランス植民地行政の中心となった。そして20世紀初頭には、フランス植民地支配下のデルタ西部開拓の前線基地として発展した。17世紀末に中国人が入植して開かれたミトーの街をデルタの東都と言うのに対して、人々はここをデルタの西都と自称する。さらに述べれば、彼らは、メコン・デルタの中心はカントーだという強いアイデンティティをもっている。1996年末に完成した同省の人民委員会の建物は、デルタ随一の巨大な公共建造物だ。実際、カントー市のこの数年間の経済発展には眼を見張るものがある。同省はデルタの豊かな農業生産の先進地域であり、都市部は近代的な生活様式を摂取してデルタ社会をリードしている。

同省の総人口は180万人に達する。また、同省の総面積約24万 ha のうち水田は17万5,000ha を占める。そのほとんどは2期作田であるが、そのうち3期作可能な水田が9万haある。そのほか商品作物として果樹(3万6,000ha)、甘藷(2万8,000ha)の栽培もなされる。

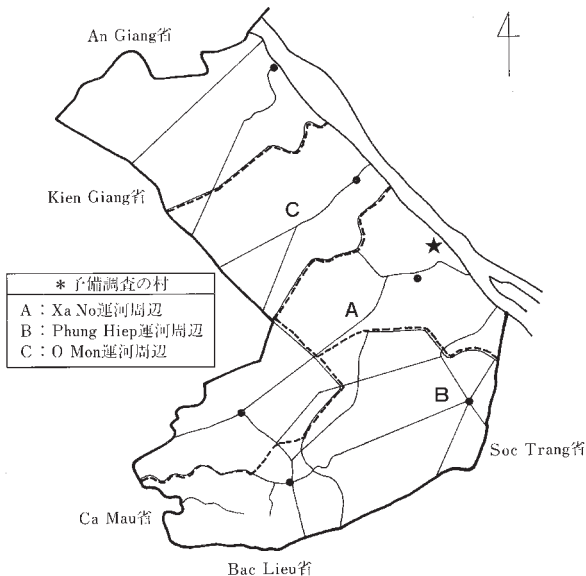
調査団は、翌29日にはカントー省農業局にて3ヵ所の農村地域の予備調査を当局に申請した。調査の候補地は、(A) Xa No 運河周辺 (Chau Tanh 県)、(B) Phung Hiep 運河周辺 (Phung Hiep 県)、(C) O Mon 運河周辺 (O Mon 県)である(第2図参照)。同日からの3日間は、それぞれの県の人民委員会を訪問して各県の数村を見学し、農民との簡単な面接調査を実施し

た。Xa No 運河はカントー川とシャム湾に注ぐカイロン川を結ぶ西部開拓の皮切りとなった有名な幹線運河である。一方 Phung Hiep は、いくつもの大運河が1点で交わるカントー省南部の中心地であり、1908年にフランス植民地政府の斡旋でベトナム北部紅河デルタのタイビン省から移民を早々と受け入れた歴史もある。いずれもトランス・バサック広大低地の開拓の要所と言える。しかし調査団は最終的には、後述する理由によって (C) の O Mon 県 Thoi Lai 村を調査村に決定した。これまでの過程で多くのカントー省のみなさんに大変にお世話になった。改めて心からの感謝を捧げたい。

b) Thoi Lai 村の農業開拓に関する仮説

Can Tho 市から O Mon 県の中心地までは約20km。Long Xuyen に向かう国道を旧 Thoi An Dong のあたりから左折し直進する。Thoi Lai 村はそこからさらに西南方向に左折し、O Mon 川に沿って平行に掘られた水路

第2図 Can Tho 省略図



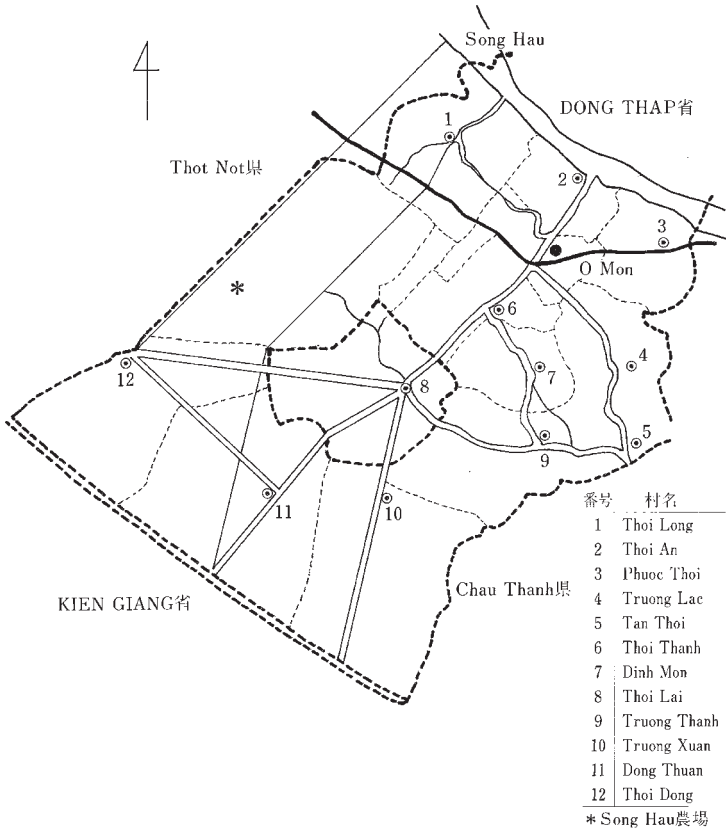
との間の道を一直線に約10km進む。Thoi Lai および O Mon の地名は、1904年に発行された Can Tho 省の地誌によれば、「泰来」および「烏門」と漢字で記されている。村の老人の1人は、昔の O Mon には市場の前に大きな黒い門があり、町の名の由来であったと言う。

先の地誌によれば、O Mon には立派な古いクメール寺があった。それは現存し、修復中である。また20世紀初頭の史料によれば、O Mon の市場周囲の O Mon 村とその西南隣の Dinh Mon 村はクメール人が多数派の村だった⁽⁷⁾。しかし現在、クメール人は寺の周りに200家族住むだけである。O Mon 県の1995年現在のクメール人の人口は1万2,795人(2,111世帯)で、県全体の4.5%にすぎない。主に O Mon の町と Kien Giang 省境の Thoi Dong 村に住んでいるだけである⁽⁸⁾。

トイライ村は Dinh Mon 村の西、ハウザン河に注ぐ O Mon 川の上流に位置する(第3図の8参照)。O Mon 川の河口流域に達したベト(キン)族が、先住民クメール族の居住地域を越えて、川に沿って入植を進めたと考えられることができる。O Mon 川はトイライ村の中心から北上して Rach Nha Tho (Nha Tho 川) と呼ばれる自然河川になり、さらに上流でいくつかの小支流に分かれる。また南下して Kinh Xeo Sao (Xeo Sao 水路) と呼ばれる川につながり、カントー川最上流の支流に合流する。トイライ地域にはいつ頃、どのように人々が住み着き行政村が形成されたのであろうか？

筆者は、1929年作成の地図上の地名群落から次のような仮説を考えた。ベトナムでは地名は普通、2つの漢字の組み合わせから構成される。その片方の漢字が共通の地名が、川の流域にまとまりをもって存在している典型例が、この O Mon 県である⁽⁹⁾。Thoi (泰) という漢字をもつ地名が、Thot Not の南からハウザン河流域に Thoi Long, Thoi An, Thoi Thanh, Thoi An Dong とあり、O Mon 川をさかのぼって Thoi Lai, O Mon 川を Can Tho 川につなぐ水路の交点に Tan Thoi の名が並ぶ。また各村に含まれる集落(Ap)名にも Thoi のつくものが圧倒的に多い。筆者はまずこの点から、キン族による開拓の歴史に何か一貫した流れを抽出できるのではないかと考えた(第1の仮説)。

第3図 O Mon 県略図



さらに、O Mon 川はトイライの村の中心から放射状に 3 本の運河に分かれ、さらに 3 運河は低地を抜けて西のキエンザン省に達する。そのうちの 2 つは Thot Not からの大運河と交わり、もう 6 つは Kien Giang 省のシャム湾に注ぐカイベ川の上流につながる。言うまでもなく、それらはトランス・バサックの浸水地を可耕地に変えた典型的なフランス植民地期の水路である。注目すべきは、その水路沿いのトイライの西、Rach Gia 省境に、先の 1904 年発行の地誌には記されていない Thoi Dong 村の地名が 29 年の地図上に載っている点である。つまり、トイライ村は 20 世紀初頭に

はトランス・バサック農業開拓の最西部に位置したと想定することができる（第2の仮説）。

このように、（1）19世紀以降に盛んとなるキン族の入植拠点の1つが、この O Mon 川周辺あたりにあった可能性、また（2）自然河川の上流域と人工的な直線運河沿いの両方を含む地形から、トイライ村の開発過程がフランス植民地期のデルタ西部の農業開拓を考察するのに最適であるという考えに至った。これに加えて、トイライ村にはカトリック教会、カオダイ教会、大乘仏教のベトナム寺、上座部仏教のクメール寺が存在し、またホアハオ教徒の農民も散在する。メコン・デルタの多様な社会文化面がかいまみられるようにも思われた。以上の理由によって、調査団はトイライ村を研究対象に選ぶことにした。

2. Thoi Lai 村の開拓

同村の総面積は約 6,000ha で、そのうち農地は4,350ha（73%）を占め、そのほかは幹線運河・2級および3級水路・宅地・公共用地などとなっている。農地のほとんどは水田4,240ha（1996）⁽¹⁰⁾である。4年前頃からミカンの栽培が盛んになった。ミカンやバナナなどの果樹畑は、現在63haである。そのほか畑には市場向けの野菜（マッシュルーム、イモ、青豆、ニガウリ等）が栽培される。

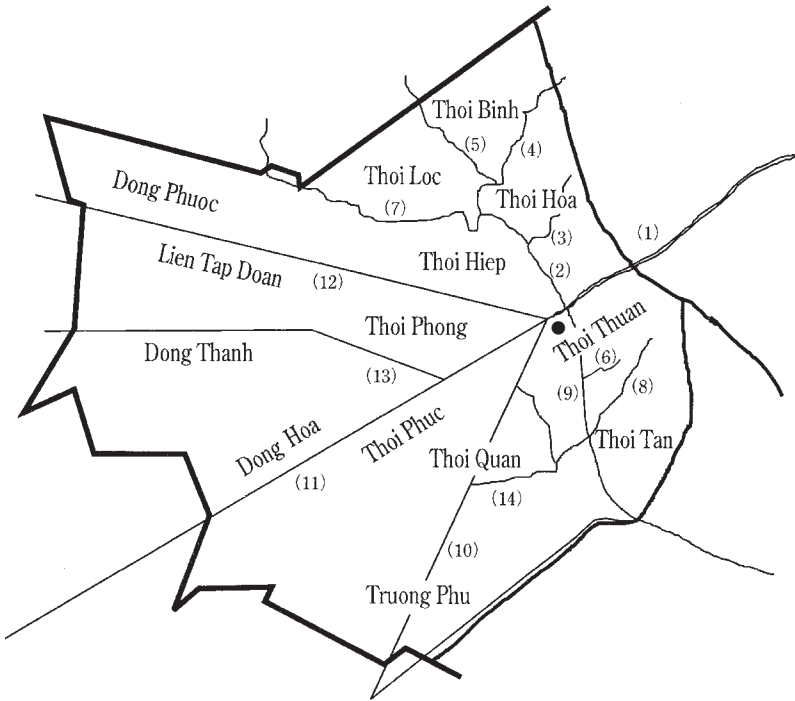
筆者は37人の農民と3人の宗教関係者に各人の個人史を中心に質問し、主として稲作の具体的方法・土地の耕作条件、地域の開拓過程、また政治社会的な歴史の節目にどのような対応をしたかなどについて尋ねた⁽¹¹⁾。

まず開拓過程と開拓民の出身地の把握を目指して、全集落を、a) 自然河川流域と、b) 3つの運河周辺域に分けてそれぞれ検討する（第4図参照）。

a) 自然河川支流流域の集落——古い開拓地

第1表が示すようにトイライ村の45%の世帯が、O Mon, Nha Tho の両川、および Xeo Sao 川等の自然河川の流域に含まれる。これら6集落

第4図 Thoi Lai 村の14集落



Thoi Lai 村の自然河川：(1) O Mon 川, (2) Nha Tho 川, (3) Vam Dinh 川, (4) Ba Dot 川, (5) Xap Halm 川, (6) Xeo Ran 川, (7) Cung Duong 川, (8) Tac Di 川, (9) Xeo Sao 水路。

Thoi Lai 村の人工運河：(10) O Mon 運河, (11) Thi Doi 運河, (12) Dung 運河, (13) Dong Phap 運河, (14) Ong Dinh 運河など。

の16人の農民のインタビュー結果から、入植（開拓）時期を推定すると第2表のようになる。

一般に農業開拓の過程は、開墾作業や耕作条件の有利な土地から始められ、生産条件の悪い地点の耕地化は遅れると考えることができる。この命題に基づけば、開拓は（1）川の下流から上流に向かって、また（2）川沿いから川岸から離れた土地へ進む、ということになる。なぜなら、キン族はハウザン河沿いの O Mon 川下流からデルタ西部地域に向かって進出していたのであるから、入植も O Mon 川上流からさらにその支流域に向

第1表 自然河川流域の集落別戸数(1996年)

Ap 名	世帯数 (戸)	村での割合 (%)
Thoi Thuan	812	14.8
Thoi Hoa	325	5.9
Thoi Loc	306	5.6
Thoi Hiep	528	9.6
Thoi Tan	312	5.7
Thoi Binh	186	3.4
計	2,469	45.0

(注) トイライ村人民委員会情報提供.

かうと考えるのが自然である。また川沿いは、毎年の浸水の際にメコン河によって運ばれた新しい土が表土を覆うので肥沃であり、かつ乾季の農業の灌水に運河の水が利用しやすい。他方、川岸から離れて奥に行くほど浸水した水は引きにくいために、土地は1年を通して排水が不十分で、その土壌は強酸性となって作物の生育に不適である。実際、川沿いの土地を分割する際には、肥沃度を考慮して相続する各地片は長方形の一辺を岸に必ず残すように境界線が入れられる。

先の(1)と(2)を念頭に置いて、自然河川流域の開拓は、まずO Mon川の沿岸からNha Tho川に北進した。それに添うように、第2表における最も古い入植の例は、O Mon川沿いの2)および3)である。とりわけ2)の場合、面接した農民は開拓した祖先の6代目だという。しかも先祖の出身地はベトナム中部である。つまり祖先の入植時期は、フランス植民地期以前のグエン朝期にさかのぼることになる。

続いてNha Tho川の初めの支流Vam Dinh川沿い5)、15)、16)も、比較的早くに開墾された可能性が高い。16)の老人は、密林に覆われたVam Dinh川流域を開墾したのは、彼の祖父を含む3人のベトナム人だったと言う。推定では、早くて1870年代後半以降のことである。5)、7)、15)、16)は、親戚関係にある。7)より5)の方が本家で、開墾時期も少し古い。15)の例はトイライ村開墾のかなり初期の時点であるように思われる。彼ら開拓者の一族は、村政を司る郷職や村長を務めた。

Nha Tho川の上流の開拓は、19世紀末から20世紀初頭に徐々に進み、

第2表 自然河川支流流域の開拓・入植時期の推定

生年	生地	民族	入植・開拓者	開拓時期	祖先の生地
1) 1925	Dinh Mong	クメール	父母(自作)	1900 頃	Dinh Mon 村
2) 1932	Thoi Thuan Rach O Mon	キン	5 代上(自作)	1830－1840s	ベトナム中部 フエ
3) 1952	Thoi Thuan Rach O Mon	キン	曾祖父(自作)	1890s－1900	母 O Mon
4) 1940	Rach Tac Di	クメール	祖父(自作)	不明	不明
5) 1913	Thoi Hoa R. Vam Dinh	キン	曾祖父(自作) 3 代上(郷職)	1880s－90s	不明
6) 1915	Thoi Loc R. Nha Tho	キン	父(小作)	1910 頃	不明
7) 1925	Thoi Hoa R. Nha Tho	キン	3 代上	1895－1900	不明
8) 1910	Thoi Loc	キン(Christ.)	父母(小作)	1915 頃	Vinh Long
9) 1928	Thoi Loc	キン(Christ.)	父母(小作)	1920 頃	Long Xuyen と Chau Doc の間
10) 1939	Thoi Loc	キン (Hoa Hao)	曾祖父と祖父 (自作)	1899－	Sadec
11) 1915	Thoi Tan	キン	父(小作)	1915－	母 Thot Not
12) 1929	Thoi Hoa Thoi Tan	(中国人) 中国系キン	父(買入れ) 本人(再開発)	1929－ 1954－	O Mon 祖父母は中国福建省 出身、O Mon に住む
13) 1925	Thoi Binh	キン	祖父	1900 前後	Sadec
14) 1918	Thoi Hiep	キン	祖父	1890－1900	Thoi Lai
15) 1925	Thoi Hiep R.Vam Dinh	キン	祖父(郷職)	1895－1900s	不明
16) 1903	Thoi Hiep R.Vam Dinh	キン	祖父 本人(郷職)	1873－90	不明

(注) 推定方法：入植者が被質問者の何世代上かを聞き入植者の生年を推計する。世代間の期間は25年と仮定した。祖先の生誕年を基にそこから少なくとも20年後に(成年時以降の)入植時期を想定。個別の入植状況などを判断して調整。

例： 曾祖父の生誕 祖父の生誕 父の生誕 本人の生誕

入植年	25年	25年	25年	
20年月	20年月	20年月	20年月	

Sadec から農民10) と13) を受け入れている。

開拓地が開墾者の所有地になる例（自作農）に対して、8）と9）はキリスト教徒が教会の土地を開墾・入植した例である。Thoi Loc 集落にあ

るトイライ教会は、1910年に創建された。トイライ地区には、1880年代以降にニッパヤシで作られた小さな教会が3つ存在した。それらがまとめられて1つの教会になった⁽¹²⁾。地主の土地を借地して最初から小作人として入植した例として、そのほか6)と11)がある。11)の農民の祖父はO Monに住む地主の、また6)の農民の父も隣村のThoi Thanhの地主の土地を耕作する小作人だった。自然河川流域の古い開拓地には、当時トイライ村より農業生産も人口増加も先行した隣のThoi Thanh村⁽¹³⁾の村人が土地を占拠し、小作地を所有していたようだ。

以上をまとめると、16人の農民の事例によれば、開拓者の出身地は、ア) ベトナム中部1、イ) ハウザン河以東3、ウ) 近隣の地域(トランス・バサックおよび同村)6、エ) 不明6と分類できる。さらに詳しく述べるなら、ハウザン河以東ではVinh Long および Sadec から、トランス・バサックではO Mon 川沿いとO Mon 川以北に見られた。自力の開拓によってその土地の所有者となった例は自然河川流域に多く、それらの開拓の時期は19世紀末が主である。最初の開拓者たちは血縁関係を形成して、トイライ村の自治にも関わった。さらにO Mon 川より上流の低地は19世紀末から20世紀初頭もまだ未開拓地として残されていた。そのような当時のフロンティアには、ハウザン河を越えて入植者が移住した。またとりわけ教会は、デルタの土地のないキリスト教徒を惹きつけて、処女地の開発に向かわせていたのである。

b) 大運河周辺——不在大地主と Ta Dien による開発

(1) 運河の周辺集落と地形

第3表から運河周辺集落の世帯数がトイライ村全体に占める割合は55%である。村の中心に近い3つの集落には、「伝統的な」Thoi(泰)という文字が頭についている。

また、中心から離れたDung および Thi Doi 両運河沿いの集落名には、Dong(東)という文字が共通である。1975年にベトナム戦争が終わって、このあたりは統一政府によりDong Hiep村として再編成された(同村に

第3表 運河周辺集落別戸数(1996年)

集落名	世帯数	総世帯比(%)
Thoi Phong	410	7.5
Thoi Phuoc	336	6.1
Thoi Quan	600	10.9
Dong Phuoc	222	4.0
LienTap Doan	408	7.4
Dong Thanh	231	4.2
Dong Hoa	359	6.5
Truong Phu	450	8.2
計	3,016	55.0

(注) 主要な運河：(1) O Mon 運河，
(2) Thi Doi 運河，(3) Dong Phap
運河，(4) Dung 運河。
(出所) トイライ村人民委員会提供。

Lien Tap Doan 集落も含む)。聞き取り調査から、その村にはかつて南ベトナム政府時代に戦略村が存在し、グエン・バン・ティウ政権期には Ngon Thien 村と称されて、新しい Dinh 亭（村の政を行うキン族の伝統的な集会所）が造られた歴史を持つことがわかった。75年以降は、統一政府によって Dinh の周辺に新しい Lien Tap Doan（集団隊の意）と名付けられた集落が

生まれ、フェその他の地域から多くの移民を受け入れた⁽¹⁴⁾。

O Mon 運河に沿った村の最南部にある Truong Phu 集落の名前は、そのほかの同村の集落名とは類似性がない。むしろ、村の南境に接する Truong Xuan 村や Truong Thanh 村の地名と共通する Truong の文字は、Can Tho 川上流一帯の地名群落に共通する。Truong Phu 集落は O Mon 河支流域と Can Tho 川支流域の境界地域にある。

地形的に見ると Dung 運河は川底が浅く、排水機能が不十分である。そのために奥地は、雨季に浸水が 1m を越す土地もある。Dong Phuoc 集落、および Dong Phap 運河兩岸の Dong Thanh 集落では、そのような問題が現在もしばしば顕在化する。O Mon 運河は他の 2 つの運河周辺より幾分標高が高い。ただし奥地の Truong Phu 集落には、浸水が 80cm 以上に達する地域がある。

運河沿いに共通することは、村の中心を背に左岸の土地は比較的高く、土盛りの部分も含めて幅 150m の微高地が帯状に続く。そこでは、民家や川に沿った道路、果物園、野菜畑などの土地利用が見られる。

（2）運河の開削と土地の払い下げ

このような大運河周辺の新田開発の開始を考える際には、運河掘削の時期が参考になる。フランス植民地期に掘削されたトイライ村の一番古い運

河は、O Mon 運河と思われる（1896年）。その後の数年間に、トイライ村の土地を払い下げ申請によって取得したフランス人のリストが第4表である。また1904年の先の地誌には、トイライ村を含む当時の Thoi Bao Tho 郡に存在する運河として、O Mon 運河（全長 15km・幅12m）と Ba Lang 運河（全長10km・幅12m）の名が掲載されている⁽¹⁵⁾。現在の O Mon 運河は、川幅最大50m、Thi Doi 運河は40－45m である。20世紀初頭と比べると、この間に改修工事が繰り返され、また自然の水の流れによって川幅は3－4 倍に広がったと考えられる。実際、調査した古老の1人は、O Mon 運河が昔は今よりずっと幅の狭い自然の川だったと述べている。次に、Thi Doi 運河の開削は1915年から1920年の期間であると思われる⁽¹⁶⁾。Thoi Hiep 部落に住む93歳の老人は幼い頃、姉とともに近代的な掘削機を使って掘削されるその工事現場を歩いて見に行ったという。文献によれば、1910年の O Mon 周辺地区では、同省の運河建設のために Dinh Thoi 郡や Thoi Bao 郡（トイライ村を含む）からそれぞれ、1,130人、2,120人を労働者として調達したという⁽¹⁷⁾。当時が、まさに運河建設の時代だったことが

第4表 Thoi Lai 村に所有地をもつフランス人リスト（1900－1906年）

氏名	生年月日	職業	住所	所有地	払下げ年月日
Wonard Achard	10/6/1870	農業監督官 土地所有者・管理人	Thoi Lai	Thoi Lai	30-12-03
E. Balme		サイゴン電気会社 土地所有者	Saigon	Thoi Lai	18-3-04
Sambuc		弁護士 土地所有者	Saigon	Thoi Lai	03-12-03
Pierre- Louis Fernand		入植者 土地所有者	Can Tho	Thoi Lai	30-12-03
Beline de Mayrena		政論記者 著述家 土地所有者	Saigon	Thoi Lai	18-3-04
Phanvan Ngun	30/12/1850	退役副総督 土地所有者	Thoi Bao	Thoi Lai	
L. Thiollier		弁護士 土地所有者	Saigon	Thoi Lai	30-4-97
Jean Perchel	22/6/1853	水先案内人 土地所有者	Saigon	Thoi Lai	30-4-97

（出所）IA 13/235（4）Province de Can Tho, *Liste des colons cultivateurs ayant les interets agricoles dans la province (1900-1906)* より作成。

うかがわれる。

Dung 運河も元は小さな自然の川だったという証言が、複数あった。乾季になると水がなくなって歩いて通ることができたという。3つの運河のなかでは、この運河は最も新しいようである。O Mon 川以北および旧ラクザー省との境の低地は、1年の半分以上が湿地となる地域であった。このような雨季に浸水したままの土地には、強酸性土壌にも耐えうる原生植物やメラルーカの木々が見られたに違いない。運河が掘られる前に入植して、原生林を開墾した祖先の話を覚えている老人が数名いた。

ところで、1916年にコーチシナ総督がインドシナ総督に宛てた9月23日付の手紙のなかに、同村の払い下げ地について報告した内容がある⁽¹⁸⁾。それによれば、1903年にトイライ村に2,039haの土地を払い下げられたBelinは規定通りに開発することができずに、4年後の1907年にThomas Thomson Turnbullに開発権を引き渡した。しかしTurnbullも払い下げ規定⁽¹⁹⁾沿った開発ができずに、1912年に土地は植民地政府に戻されてしまった。そのために、現地人やその他のヨーロッパ人から、大区画のその土地をさらに小さな地片に分けて払い下げてほしいという要求がでた。購入を希望する者がいたので、コーチシナ総督は土地を分割して公開競売に付した、という文面である。これに基づくなら同村の運河周辺の開発は、1916年頃以後に本格化したと考えることができる。

当時のフランス側史料によれば、払い下げの地片は長方形の一辺が必ず運河に臨むように要求され、したがって払い下げ地の区画は運河に沿って並んでいた。聞き取り調査から、運河に面した払い下げ地の隣の払い下げ地との境界は、所有者の命令でTa Dienによって掘られた水路であり、さらに区画内は細かく小作地に分けられていた。

(3) 3つの開拓時期

聞き取りの結果から、筆者は植民地期の運河周辺の開拓過程には3つの段階があったと考える(第5表参照)。その第1は、村の中心部に近いThoi PhongとThoi Quan両集落の農民の話に出現する運河掘削以前における農民の自発的な開墾である。次に第2の開拓として、植民地政府によって

法的払い下げを享受した地主の支配下で、小作人 Ta Dien が村外から入植してくる時期である。さらに第3の開墾期は、インドシナ戦争の混乱によって荒廃した土地の再開墾の事例である。抗仏（インドシナ）戦争中のトイライ村では、Ta Dien は運河周辺奥地のベトミン側か、トイライ村の中心部に陣取るフランス側のどちらかに逃亡し、当該地域の不在地主の所有地の大部分は耕作放棄地となった。ジュネーヴ協定直後の再開墾には元の Ta Dien が戻った場合と、別の入植者によるものの2種類がある。

まず、開発の第1段階と見られる事例は17)、18)、32) の3つしかない。17) の農民の祖父は、1890年代に、当時はカントー省に含まれたハウザン河左岸の村から夫婦で Dung 川沿いの地に入植した。村の中心に近い場所である。人づてに、無主の開墾可能な土地が O Mon 川の先のトイライにあると聞いて来た。それは Dung 運河が掘削される前の、自然河川の時代である。その頃はクメール人の住居が Truong Thanh 村（トイライ村の南）にもまだたくさんあったという。

32) の例では、Thoi Lai の精米所（村の中心部）近くに住んでいた祖父が亡くなったので、インタビューした農民の父はまだ子供であったが7人の兄弟とともに小さな O Mon 川沿いのジャングルのような原生地を開墾したそう。まだ入植者は少なく、イノシシや虎が出没する原生地で木を伐採し、草を刈りそして田を作った。全部が人力による開墾だった。兄弟で開拓した田は、父が結婚する頃には13ha に及んだ。その後父の兄の名義で土地所有権を獲得した。父たちの成功を見て、他の人々も開拓を試みて後に続いたという。天然の O Mon 川が運河として拡大されたのはその後のことであり、運河の完成によって彼らの土地は運河の両岸に分かれた。1920年代末から30年代に入っても、O Mon 運河の両側に入植する人はまだそれほど多くはなかったという。運河沿いに、数百メートルも離れた間隔で開拓者の家が並んでいた。

19世紀末から20世紀初頭の早い時期にこのように自力で処女地の開墾に成功した入植者は、トイライの村政を預かる有力者となった。それは、前述した自然河川の O Mon 川や Nha Tho 川上流の開墾者たちの場合と同

第 5 表 運河周辺集落の開拓時期の推定

生年(歳)	入植者の出身地	開拓者	開拓・入植地	開拓時期	備考
17) 1919 (78)	旧 CanTho 省 Hau 河左岸	祖父 (郷職)	Thoi Phong	1890－	自作
18) 1936 (61)	不明	曾祖父	Thoi Phong	1881－	自作
19) 1919 (78)	Vinh Long Rach Gia	父 本人	Rach Gia Thoi Phong	1920s－ 1955	小作 小作
20) 1931 (66)	Can Tho	祖父	Dong Phuoc	1900s－	小作
21) 1915 (82)	Thoi Loc	父	Dong Phuoc	1910s ?	小作
22) 1910 (87)	My Tho	本人	Dong Phuoc	不明 入植は 40s	小作
23) 1916 (81)	Dinh Mon	本人	Lien Thap Doan	1950－	自作 Dinh Mon－ Rach Gia－Co Do－
24) 1924 (73)	Thoi Lai	本人	Lien Thap	1950－55	小作
25) 1917 (75)	Giong Rien (Rach Gia)	本人	Lien Thap Doan	1954－	自作
26) 1925 (70)	Giong Rien (Rach Gia)	本人	Dong Thanh	1954	自作
27) 1917 (80)	Sa Dec	祖父	Dong Thanh	1890s	小作
28) 1933 (63)	Thoi Binh	本人	Thoi Phuoc	1956	自作
29) 1937 (60)	Thoi Hoa	父	Thoi Phuoc	1954	自作
30) 1932 (65)	Thoi Long (O Mon)	父母	Dong Hoa	1920s 末 1930	小作
31) 1935 (62)	Thoi Dong	父・ 本人	Dong Hoa	1954	自作
32) 1920 (72)	Thoi Lai	祖父	Thoi Quan	1890s－ 1900s	自作
33) 1924 (73)	Dong Thap	祖父	Thoi Quan	1900s ? 1910s ?	小作
34) 1915 (77)	O Mon	祖父	Thoi Quan	1915 ?	小作

35) 1924 (73)	Thot Not	祖父	Thoi Quan	1920s	小作
36) 1937 (67)	Dong Thap	祖父	Truong Phu	1907	小作
37) 1926 (71)	不明	祖父	Truong Phu	1900 頃	小作

(注) 開拓開始時期は前表と同じ算定方法に個別情報を加味して推定したもの。

17)―37) はインタビューした農民の番号。

様である。

次に開拓の第2の事例は、20)、21)、22)、27)、30)、33)、34)、35)、36)、37) である。入植の時期は27) 以外はほとんど20世紀以降、1910年代もしくは20年代と思われ、明らかに第1の開墾者のそれより新しい。不在地主の居住地および小作人の出身地については、後述する。

最後に、フランス植民地支配の終了後の1954年以降第3期の再開拓の事例も見ておきたい。もとの小作地に戻ってきて再開墾した農民は10例、すなわち20)、21)、22)、27)、30)、33)、34)、35)、36)、37) である。戦前の地主の小作地を別の農民が占拠した例として19)、23)、24)、25)、26)、28)、29)、31) の8例ある。つまり、フランス植民地政府が撤退した後、戦争の混乱や解放区の実績に乗じて、土地の占拠人は調査地域において半数近くも変化していた。集落によって差があるものの、運河周辺集落や Thoi Binh など O Mon 川支流奥地の比較的新しい開拓地（不在地主の土地）では、開拓者である元の Ta Dien の3割から5割は耕作地から離散した状況が生まれていたという。

インドシナ戦争中のトイライ村では、植民地政府軍が完全に押さえていた地域はトイライ村中心部と、Kinh Dung 沿いの地域だけだった。危険ななかで水田の農作業を行った農民も、夜には村の中心近くで避難生活を送っていた。運河はあちこちでベトミン側によって埋められ、また岸边には地雷が埋められ、フランス植民地軍の侵攻を阻んだ。ベトミン側についた農民は運河奥地の湿地帯で少なくとも7年以上に及ぶ生活を経験していた。

戦後の再開発には3年以上の月日がかかったという。不在地主の土地を再分配し荒れ地を再開発した農民のうち、もとの地主に地代を支払い続けた農民（土地証書をベトナム共和国政府から交付されるまで）と、支払わない農民（例えば地主が逃げ去ったフランス人や村方地主であったり、危険を避けて徴収に来ない不在地主に対して）がいたようだ。地主の土地権問題は、基本的には南ベトナム政府と地主の交渉によって処理された。グエン・バン・ティウ政権期の1970年代初頭には、土地なし農民や占拠した農民への土地分配および土地証書の交付が実施された。

（４） 入植者の出身地

20世紀初頭のカントー省の人口増加について文献によれば、同省の死亡率を上回る出生率と、コーチシナ東部からの移民、またデルタ中部から移住してくる中国人の定着をその要因としてあげている⁽²⁰⁾。インタビューしたトイライ村のフランス植民地期開拓農民の出身地は、第6表の通りとなった。

この集計によれば、聞き取りをした運河周辺農民の祖先（入植者：父母もしくは祖父母）の出身地は、(a) ハウザン河以東と (b) 現カントー省内が多かった。また (c) 同村内の移動も多く、その場合は開拓の比較的古い自然河川流域の集落から運河地帯への入植の例が複数あった。

運河沿いの農家を入植先別に分けて見ると、村の中心部に比較的近い場所への入植は、どちらかと言えば村の中心部からの入植が多かった。これ

に対してさらに奥地の運河沿いの払い下げ地では、最も遠隔の Dong Thap やハウザン河の対岸からの入植が多く見られた。彼らの多くは、20世紀初頭1910年代末もしくは20年代に Ta dien として開拓に従事するために投入された。また興味深いことに、初めは Rach Gia 省の

第6表 入植者の出身地

出身地 \ 入植地	自然河川流域	運河周辺	計
ハウザン河以東	3	8	11
現 CanTho 省周辺	2	1	3
現 省 内	3	6	9
同 村 内	1	4	5
不 明	6	2	8
ベトナム中部	1	0	1
計	16	21	37

(注) インタビュー結果による分類。

払い下げ地の開発に Ta dien として移住した後、フランスからの独立戦争の混乱で土地を追われ、1955年前後に Thoi Lai 村の運河奥地の耕作放棄地（元小作地）に定着した例が目立った。

クメール人のなかには、Thoi Lai 村東部の Tac Di や隣の Dinh Mon 村からインドシナ戦争による混乱を逃れて、Thoi Lai 村の中心部に避難した人々がいる。彼らは、その後土地を喪失して、没落を余儀なくされた。Dinh Mon 村では、当時クメール人やベトナム人を募って、Rach Gia の荒蕪地（フランス人の払い下げ地）を開発するための集団移住も行われたようだ。彼らは後にベトミンとフランス植民地軍との戦闘に巻き込まれ、フランス軍によって Co Do（フランス人の農園が存在した村）まで集団疎開させられた。そしてそこで「パルチザン」として、Co Do のフランス人農園の耕作と防衛戦争に動員された。傭兵となった彼らの一部は、ゴー・ジン・ジェム政権時代に、トイライ村に移動させられ、Ngon Thien 村（現 Lien Tap Doan 集落）にあった政府軍の駐屯地に配置された。

3. 水稲耕作と小作制度の実態

a) 「伝統」的雨季稲栽培

開墾した土地で人々が生産したのは、もっぱら商品作物としての米である。フランス植民地期のトイライ村の中心部すなわち3つの運河の始発点には O Mon 川に面して精米所があった。それは中国人が経営していた。カントーや O Mon の町から仲買人が生産者の庭先まで籾を買いに来たことや、後述する Hung Dien の管理下で小作人は小作料を籾で供出し、それは川縁の地主の倉庫に収められたこと、また Dong Thap に住む地主の家までハウザン河を越えて籾の小作料を納めに行っていた Ta Dien の話も聞いた。Ta Dien は、彼らが日常の必需品を地主の万屋でついで購入する時も籾で後払いし、また借金とその返済も籾を介したという。籾は、ほとんど貨幣のように機能していた。

第7表 トイライ村伝統品種 Lua Mua (雨季稲) の生産 (陰暦 1cong=1,300m²)

	集落名	耕起 回数	播種 月	田植 月	田植 月	水深 cm	収穫 月	収量 gia/cong	備考(その他作物等)
5	TH		3	4	6				1975 年まで Lua mua
6	TH		4	5	7		12-1		トウモロコシ・サツマイモ
7	TH							20	
8	TL							2-3	
9	TL							10-18	サツマイモ 水牛 2 頭立て
10	TL (教会)	2		4	6	60		15-20	戦後は機械導入・直播65年 ～2期作化・71年～神農
12	TP							15	
15	DH							7-12	
16	DH	2	5				1	12-18	直播 8月草取り
18	TTh							17-18	1958-機械化 田植 1 回
19	TQ		4/10	5/10	7/10	50	2	7-15	8月草取り トウモロコシ・ サツマイモ
20	TTa		4・5	5・6	7・8	50	1	12-13	第2回田植は 1 cong 10 cong 不作年 7 gia 豊作年 20 gia
22	TP	1	4	5	7	10	2	18-20	トウモロコシ・サツマイモ・ 野菜 1958～直播・水牛導入 3回 耕起 1960～機械化
23	TP (TH)	1							1954～水牛導入 田植 1 回 1956/57～直播化
24	TB		3・4				2	18-20	直播 トウモロコシ・サツマイモ
25	TrP		4	5	6・7		2	10-17	農閑期は出稼ぎ
26	TrP	2	4	5	6・7	20	2		
27	DP		3	4	6	30	2		1954～直播 9 月水深 60cm
28	DP		3	4	5	40	2	20	最高水深 1 m 1954～直播き
29	DP							15	Trung hung 品種 浮稲 直播
30	DT		3 半	4 末	5 末	20	2		3 月田起こし 最水深 80cm 1960～機械化 直播
31	DT		5/5	5/25	7/25		2	15	最深水 1 m
32	LTD							12-13	2 回田植え 1 m 浸水
33	LTD							15-17	75 以降直播 1.2m 浸水
34	LTD							7-10	

35	THi						15	R. BaDoc 最水深 150cm
36	THi						15	最水深 80cm
38	TQ		3	4	6	50	3	8-10
39	TQ		4	5	7		2	15
								直播は 1965~Trung Hung

当時のトイライ村では、1年に1回だけ収穫される伝統種の雨季稲 Lua Mua 栽培が最も多く見られた。

雨季稲栽培は、まず苗床を準備して旧暦4月前後に播種、約20日後に第1回目の田植えを行った（第7表参照）。播種の時は、一つかみの籾を3回に分けて苗床にあけた小さな穴に落としていく。苗が育つ間に、堅く乾いた本田の土を起こして準備する。初めは表面がうねるように掘り起こし、次に櫛鋤をつけて表土をならす。水牛を使えば、土の深さ15cmまで耕起可能である。第2回目の田植えは1回目の2ヵ月後に行う（7月前後頃）。初めの田植えは、一つかみ1束ずつ植える。稲が40cmほどに成長すると、最終的な本田に3-4本ずつ苗を植え直す。2回目の田植え時に、田にたまった水の深さは10-60cmになっている。苗代から本田への植え替え面積の比率は場所によって異なる。収穫はほとんどの農民がテト前だったと述べている。収量は1cong（=1,300m²）当たりほぼ15gia⁽²¹⁾であった。良田では20gia、しかし10giaしか穫れない不作の年もあった。

田植えを2回行っていたのは、乾季の間に堅くなってしまった土の耕起に手間取るので、本田の準備が間に合わないことが主な理由のようである⁽²²⁾。インドシナ戦争後に南ベトナム政府によって機械の導入が図られた田では、田植えは1回もしくは直播きに転換した。

しかし、雨季の洪水によって水深が1mを越えるような場所では、Trung hung と呼ばれる浮稲が栽培されていた（Dong Phuoc と Thoi Binh の集落）。ベトナム戦争期に戦闘が激しくて田植えができなかった Thoi Quang の農民も、やむを得ず Trung hung の直播きを行った。このあたりは、Long Xuyen 以北に一般的に見られた浮き稲栽培の境界地域である。

籾の刈り入れが済むと、自家用および販売用にサツマイモやトウモロコ

シを作る農家もあった。イモは比較的高値の商品作物であったようだ。しかしそのような稲以外の作物栽培は、冬の灌水が可能な水路に面した土地で、しかも自作農民でなければできなかった。後述するように、地主は、小作人が米以外の作物を生産することを、概して禁じる傾向があったからである。

b) 地主 Dien Chu と仲介者

自然河川流域および運河地域双方の地主の居住地を分類すると（第8表）、ハウザン河以東では先の Dong Thap 24)、 Vinh Long 39) の2例がある。次にハウザン河以西では、Can Tho 25)、 O Mon 27)、 Xa No 運河近くの 30) の例がある。

隣村 Thoi Thanh の出身でフランス植民地期に O Mon 県の県知事を務めたトーイ (Thoi) という人物は、O Mon 運河奥の Truong Phu に多くの土地を所有した 40)。同じく Thoi Thanh 村の地主 7) の例もある。トイライ村の西の Thoi Dong 村にはフランス人の「マレイ (Paul Emery と推定)」という地主がいた 31) 37) 38)。同表には現れないが「マレイ」の小作人たちが、Dong Thanh や Dong Hoa, Dong Phuoc, Lien Thap Doan など Thi Doi 運河沿いおよび Dung 運河奥の Thoi Dong 村寄りの諸集落に集中している。

Ta Dien であった老農夫たちの証言によれば、「マレイ」は Dung 運河をさらに西進した Co Do の町にフランス人の妻とともに住んでいた。しかし、所有地には収穫の頃に見回りにくるだけで、ほとんどサイゴンかどこかで暮らしたようである。彼の下で数名のフランス人とベトナム人が、所有地を管理していた。Co Do には小さな飛行場や教会があり、フランス人用の屋敷が建っていたという。

調査で得られた唯一の在村地主は、Dong Phuoc 集落と Dong Thanh 集落の2つのケースである。彼らの地主は同一人物で Tay Tuu Trong という。Trong はベトナム人だがフランス国籍をもち、母とともに Dung 運河沿いの現 Lien Thap Doan 集落近くに住んでいたという。インドシナ戦争

第8表 小作地の規模、小作料一覧

(1 cong = 1,300m²)

農民の番号	小作地の場所 (集落)	地主名 (居住地)	小作地規模 (cong)	小作料 gia (/cong)	収量 gia (/cong)
7	Thoi Binh	Tham Thanh Doi (Thoi Thanh)	20	3	20
9	Thoi Loc	教会	50		
10	Thoi Loc	教会	50		10-12
19	Thoi Phong	Lam Thi Dung (不在地主)	65		
24	Thoi Quan	Nguyen Viet Luc (Dong Thap)	200	5	8-10
25	Thoi Quan	Tran Van Nhut (Can Tho)	40	4.5	15
26	Thoi Quan	Ng. Huu Phuc	20	5	?
27	Thoi Tan	O. Van Thoi Hoi Dong An (O Mon)	200-300		12-13
29	Dong Phuoc	Tay Thu Trong (Thoi Lai)	60	4-5	20
30	Dong Phuoc	Hoi Dong Muoi (Xa No)	50	2	10
31	Dong Phuoc	Marey (Thoi Dong)	50	1	15
36	Dong Thanh	Tay Thu Trong	30	2.5	15
37	Dong Hoa	Marey (Thoi Dong)	50		7-12
38	Dong Hoa	Marey (Thoi Dong)	100	3.5	15-18
39	Truong Phu	Phan Luong Hie Phan Luong Ba (Vinh Long)	20	3	15
40	Truong Phu	Ng. Thuon Trinh Hien (Thoi Thanh)	60	4.5	?

が始まると4,500cong以上の所有地を放り出して、サイゴンに行ってしまった。

ところで、現地で小作制度を維持するために地主に雇用された管理職に、

Cap Rang, Huong Dien, Dien Chu Manh などがある（1996年12月のロンアン省調査では、5－100ha ほどの規模の土地の耕作を地主から任された中間地主を現地で Bao Ta と呼ぶと聞いた）。

Dong Hoa 集落の Thi Doi 運河南側の小作地を耕作した M 氏によれば、地主（フランス人マレイ）の土地を管理したのは、Huyen Khai という人物で、彼の下で Nam Thiet という名の男が小作人たちをまとめたという。同集落の N 氏は、Khai の子分は Chep という男で、その下に 3 人の Cap Rang が雇われていたという。それぞれの下に、Huong Dien が 4 人ずついて、彼らが直接に Ta Dien と接触して小作契約を交わし、農具や水牛の賃貸、農繁期の労働力の調達、小作料の収集等を世話する。Huong Dien はそれぞれの Ta Dien の能力を見定めて小作地の面積を決めた。Huong Dien 自身も地主の土地を借りて耕作していた。

Dong Thap の地主 Luc 24) は、O Mon 運河ができると運河に沿った払い下げ地を取得して、信用のおける彼の小作人をその土地に入植させた。その地主は600cong を越える小作地の管理を彼のほか数人の Huong Dien に任せ、収穫の頃には Dong Thap からさらに Cap Rang を派遣して作柄などを調べさせた。

c) 小作地の経営

小作地の規模は、基本的には労働可能な家族数によって決まる。また働きの農民の家族には多目に、信用のない Ta Dien には少なく配分される場合もある。それを差配するのは地主の子分である先の Huong Dien である。第 8 表にある 29) の農民によれば、20から30cong の小作地が普通であったが、Dung 運河奥の開拓者であった祖父は在村地主の土地を 60 cong 任されていた。また 30) の例では、旧 Thoi Binh の処女地を開墾していた父が、Xa No に住むベトナム人地主に雇用されて Dung 運河奥地の小作人となった時、経営規模は初め1920年代に 5－10cong 程度から始まり、子供が成長して十分な働き手となって父を手伝うようになった30年代には、50cong まで拡大したという。フランス人地主の Ta Dien であった

38) の父は Thoi Dong 村の100cong の小作地を家族 5 人で耕作した。37) では新婚当時の父母が隣村から入植した時、50cong を契約したという。このように小作地の規模は多様である。さらに 24) 27) に見られるように、家族だけでは耕作できないほどの広い小作地を借り、水牛や雇用労働力を用いて経営する者もいた。Ta Dien の階層にも、その経済生活にはかなりの差があったように思われる。

次に Ta Dien が地主に支払う小作料は、その土地収量の善し悪しや規模に対応して、あらかじめ決められた。開墾当初は 1cong 当たり 2gia ほどの低率から始まるが、聞き取りのなかでは 5gia を上限とした。不作で小作料が支払えない時はまけてもらったが、翌年の収穫時に精算した。収量はほぼ15gia (すなわち 1ha 当たり11.54gia=2.3ton) を平均に、10gia から20gia の幅がある。毎年 of 作柄は変動する。全収量に対する小作料の割合は、調査結果の分析では 2 割から 6 割の間である。Ta Dien 階層の経済生活は時代によって変化したと思われる。しかし今回の聞き取り調査の結果だけでは、その点を考察する材料が不足している。

収穫した粳は小作料のほか、人頭税の支払いや日常品の購入用に換金しなければならないので、小作人が米を食べることはほとんどなかったという。しかも地主は、先に触れたように、自分の土地で小作人が勝手に米以外のものを生産したり売買することを禁じていた。バナナやココヤシにしても勝手に植えてはならない。水路の魚も自家用のみ捕獲して良いが、稚魚や産卵する雌の魚は禁じるというほどである。

ただし、小作人のなかには農閑期の出稼ぎによって収入を補充する農民もいた。農閑期に自分の小舟でさまざまな地方に出稼ぎに行くことができた Ta Dien は、ベトナム人地主の Ta Dien のみだったようだ。彼らは毎年、粳の収穫前と次の稲作準備を始めるまでの 2-3 ヶ月の間、さまざまな土地に出かけて農業労働者として働いた。彼らは掘削された運河を通して、デルタのどこにでも容易に移動した。ある農民は、ラックザー、バクリュー、ソクチャン、ロンスゥエン、ドンタップなどデルタの広域で働いたという。家族全員で毎年移動生活を数ヶ月続けるケース、妻と子を残し

て単身で出かけるケースもあった。自作農であっても生活が苦しくなると、臨時の仕事を求めて運河を旅した。彼らは、自分の裁量で自由に場所と時期を決めて、移動労働を実行していた。

むすびにかえて

本稿は、冒頭に述べたように1997年7月から8月にかけて実施したメコン・デルタ農村開拓史調査の中間報告である。調査したトイライ村は、フランス植民地時代に典型的な輸出米生産地帯となったデルタ西部の村である。稲作の立地条件から見た地形区分のカテゴリーでは、メコン・デルタ氾濫原（広大低地氾濫原）上にある。しかも村内には、自然河川流域部と開削された人工水路周辺の2つの地形要素が含まれる。

調査結果および歴史資料などから判断して、トイライ村の開拓史は次のような過程を辿ったと筆者は考える。まず19世紀前半のグエン朝時代には、1836年の村落リストに *Thoi Lai* はまだ登場しない。しかしその後フランスの到来以前つまり19世紀半ばには *O Mon* 川上流域に、ベトナム中部からの移住者が到達していた。フランス支配下で行政機構がほぼ確立される80年代以降、19世紀末頃には、*O Mon* 川の上流の支流域、すなわち *Nha Tho* 川やその分流の *Vam Dinh* 川流域において、ハウザン河を渡って入植したベトナム人による開墾が行われ、開拓者（自作農民）の血縁・地縁関係も成立して行政村トイライが形成された。やがて村の中心部から *Rach Gia*（*Cai be* 川）を結ぶ *O Mon* 運河が1896年以降掘削されると、フランス人のトイライ村への土地取得熱が高まった。それはまさに、フランス植民地政府の下で西部開発の時代が同村でも始まりかけた証拠である。1910年代に同村を含む周辺地域で、2,000人以上の労働力が運河掘削工事に調達された記録がある。トイライ村では *O Mon* 運河の拡張工事や *Thi Doi* 運河の建設も始まって、運河周辺に土地権を取得した不在地主が、次々に *Ta Dien*（小作人）を開拓事業に投入した。*Ta Dien* がどのような状況のなかで調達され、地主の開墾地に向けられたのか詳細は定かではない。

調査した農民のなかに当事者の世代はわずかしかな存在していないために、推測するのは困難である。隣接するクメール村の農民が、Rach Gia のフランス人不在大地主の払い下げ地に集団移住したケースは興味深い、キン族の場合は、調査した農民の例ではほとんどが個人による入植のようであった。

フランス植民地期の水田開拓はコーチシナ東部からの移民によるとする通説に反して、トイライ村のインタビューに応じた農民の親族は、せいぜい遠くてドンタップ、サデックおよびヴィンロンなどデルタ中部からの移住者であった。また自然河川の奥地や新運河の奥地ほど遠隔地からのケースが多かった。これに対して村の中心部に近い集落では、O Mon 川下流域もしくは以北の Thot Not、せいぜい Long Xuyen 程度の近場からの移動であることが多かった。はじめに到達した者ほど、農業条件の良い村の中心部や河川・運河に沿った土地を確保していったことが容易に想像される。後発の入植者は新設された運河をさかのぼってデルタの奥地には入り込んだ。彼らの多くは農閑期に無数の運河を渡り次いで、トランス・バサックのデルタ内を自由に移動し、臨時雇用を求めることも生業の一部とした。

雨季に沼地となる一方で乾季には河川水も届かなかった人跡未踏の奥地が、こうして運河の掘削後は急速に開かれた。開削された運河周辺では、メコン・デルタを代表する大土地所有制、大地主＝小作関係の下で「強制された」米生産が行われた。このような生産を支えた Huong Dien や Cap Rang の制度は、今回の調査で初めて知ることができた。

トイライ村の大地は、乾季には水不足のために非常に堅くなった。またフランス植民地期の運河は現在よりも幅の狭い、小規模の水路でしかなかった。したがって、天水に依存する開拓地の雨季のはじめの耕作は水不足の危険があった。このような厳しい自然条件のなかで、人々は降雨を待って本田を準備した。稲作は、一般に年1期作の雨季稲を2回田植えする方法が採られていた。農民によれば、それは田起こしが容易ではなかったからだという。1975年の解放前まで、氾濫原の真ん中で行われていたこのような農法を実際に知ることができたことも、今回の調査の収穫であった。

さらに、フランスと解放勢力の間で戦われたインドシナ戦争の終了直後に、戦争中に放棄された不在地主の土地が、元の小作人のほかに、かなりの比率で周辺から入植してきた農民たちによって再耕作されていたことも注目される。彼らの土地権をめぐる対応は複雑であり、今後の興味深い研究課題になるだろう。同村ではベトナム共和国政府によって、耕耘機の導入や肥料、非感光性の高収量品種米が部分的に紹介されていた。しかし同時に、トイライ村は政府軍と民族解放戦線の軍事力がぶつかり合う危険地帯であったために、村の農業生産の近代化は戦後の1980年代以降に持ち越されることになるのである。

トイライ村はハウザン河以西の典型的なデルタの農村であることは明らかだ。しかもメコン・デルタを特徴づける運河社会のなかで、同村の地理的位置は重要である。フランス期に掘削された運河は、人々の生活の一部となって現在も利用されているばかりではない。市場経済の導入以来、再び商業化の波にのみこまれるデルタの農業生産を背景に、同村はO Mon県随一の稲集散地として現在、急速に発展しつつある。3つの大運河の出発点であり、終着点でもある同村の機能は、メコン・デルタ西部において今後も十分に生かされていくように思われる。

〔注記〕筆者は、1997年12月6日に開催された東南アジア史学会関東例会（早稲田大学）において同テーマを口頭発表した。適切なコメントを頂いたことを記して感謝の意を表したい。

（注）

- (1) 1995年から3年間続いたメコン・デルタの本調査は1997年度で終了する。これまでの調査結果は次のものを参照されたい。初年度の一般踏査は「歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓：1995年夏の現地調査報告」千葉敬愛短大国際教養科紀要『国際教養学論集』No. 5, 1995年10月所収、および「チャヴィン省のクメール・クロム——1995年夏のメコンデルタ農村調査報告」同紀要、No. 6, 1996年4月に掲載されている。第2年度のチャヴィン省砂丘上村落（Xa Hoa Thuan）の調査報告は、『メコン通信』No. 2（千葉敬愛短大高田洋子研究室、1997年3月発行）と、『メコン通信』No. 3（敬愛大学国際学部高田洋子研究室、1997年7月発行）上に掲載した。
- (2) 代表的な著書として、南部ベトナム人のSon Namによる一連の著作 *Lich Su Khan Hoang Mien Nam*（南部の開拓史）、Dong Pho Xuat Ban, Saigon, 1973 および Pierre Brocheux, *The*

Mekong Delta: Ecology, Economy, and Revolution, 1860-1960, Univ. of Wisconsin-Madison, Center for Southeast Asian Studies, monograph Number 12, 1995 など。ベトナム戦争の時代にはアメリカの顧問団がデルタの農村調査を行った。政策形成的な観点からの調査ではあったが、そのなかからアメリカ人のベトナム農村理解は高まった。カインハウ村についてのミシガン大学グループによる調査は、多くのレポートを生んだと言われる。ジエム時代の土地改革や、テュウ政権下の土地分配などを考察するときに当時の彼らの研究は大いに検証されるべきだろう。アメリカ人の研究はベトナム戦争終了後の1970年代半ばからは下火となった。また1970年から74年にかけて、国連機関やFAOなどの国際機関の委託を受けて、京大東南アジア研究センターのメンバーが中心となったメコン・デルタ調査の成果は、74年、75年に公開された『東南アジア研究』誌上の多数の諸論文に見ることができる。筆者らの調査は小規模ではあるが、ベトナム戦争後の日本人による初めての組織的なメコン・デルタ歴史調査と言える。

- (3) プロジェクトの研究組織は、カインハウ村は（以下敬称略）桜井由躬雄（東大・ベトナム史）、ミラムおよびフーズック両村は田中耕司（京大東南アジア研究センター・作物学）を中心とするチームが調査を組織した。その他水文一般を河野泰之（京大東南アジア研究センター）、水質調査を中村圭三（敬愛大学・自然地理学）、土壌および作付体系一般を Nguyen Huu Chiem (Can Tho 大学) が担当した。ホアトゥアン村は筆者（全体の研究代表者）が、またトイライ村は Pierre Brocheux (Paris 第7大学) と筆者が調査をコーディネートした。このほか研究協力者として Nguyen Dinh Dau（ホーチミン市社会科学協議会）、大野美紀子（立命館大院生）、松尾信之（東大院生）、重久美紀子（学術振興会特別研究員）、武永絵里沙（上智大学院生）、今村宣勝（東京外国語大院生）が参加した。
- (4) 高田洋子「新しい契約：メコンデルタの開発」、池端雪浦編『変わる東南アジア史像』、山川出版社、1994年所収参照。
- (5) 今回の Can Tho 調査団は筆者、Chiem、Brocheux、河野、大野、今村の6名。通訳は Tran The Trung。
- (6) ヒヤリング調査の結果は、『メコン通信』No. 4（1998年3月発行）に掲載予定。1997年7月17日にホーチミン市に到着した筆者は、それから10日間を同市のベトナム国家公文書保存センター II における文献調査に費やした。現地調査を予定していた Can Tho 省の農業に関するフランス植民地期の公文書を、渉猟するためである。すでに1997年3月に、南仏エクサンプロヴァンスのフランス海外植民地公文書館においても、筆者は同様の目的の史料調査・収集を行った。しかし本稿では実地調査の成果を中心にとりまとめたので、収集した文書館史料は必要最低限の範囲でしか使用していない。
- (7) ベトナム国家公文書保存センター II（在ホーチミン市）（以下 LT と略）が保存するフランス植民地期 Can Tho 省 Thoi Bao 郡各村の郷職に関する史料による（IA 17/244）。
- (8) Huyen Uy va Uy Ban Nhan Dan Huyen O Mon, *Tong Ket Su Phat Trien Kinh The-Xa Hoi Huyen Omon Den Nam 1995 Va huong Phat Trien Den Nam 2000*, Can Tho, 1995, p. 12.
- (9) このような傾向はドンナイ川流域でも見ることができる。
- (10) Tong Hop Cac Chi Tieu, *Kinh Te Xa Hoi Huyen Omon*, Can Tho, 1996.
- (11) インタビューに応じてくれた農民は、村の当局者が決める場合と、こちらの要求に沿って選ばれる場合と両方であった。また彼らの年齢別構成は、90歳代（1907年以前生まれ）1名、80歳代（1908-1917年生まれ）7名、70歳代（1918-1927年生まれ）16名、60歳代（1928-1937年生まれ）10名、50歳代（1938-1947年生まれ）2名、40歳代（1948-1957年生まれ）1名。
- (12) Thoi Lai 教会はカントーの教区に含まれる。現在の僧侶は、ベトナム北部ナムディンから1954年に南部に移住した人で、着任2年目である。それ以前は Bac Lieu 省にあるナムディンからの移住者の村の教会にいた。トイライ村のカトリック教徒は、現在3,000人である（村の総人口の10%）。

- (13) LT IA 13/235 (3)。1911年9月の史料から確認できる。
- (14) メコン・デルタの各地には、1975年の解放後に、ベトナム北部および中部の人口稠密地帯から組織的に投入された移民の入植地がある。かつてのフランス人やベトナム人大地主の土地は国営・省営の農場として建設された。トイライ村の北にも広大な土地を確保してカントー省が運営する Song Hau (ハウ河)農場が存在する。地域の農業の近代化のためのパイロットの農業試験場である。
- (15) Societe (La) des Etudes Indo-Chinoises, Geographie, Physique, Economique et Historique de la Cochinchine, Xe Fascicule, Monographie de la Province de Can-Tho, Saigon, 1904, p. 8.
- (16) フランス植民地期に Can Tho 省で最初に開削された運河は、Xa No (1900-1905年に工事)である。その効果をみて、次に Thot Not と Rach Gia の Thi Doi を繋ぐ運河が1908-1910年に建設された (LT IA 13/236 [4])。O Mon および Thi Doi 両運河については、次の文献から推定。Gouvernement general de l'Indo-Chine, *Dragages de Cochinchine*, Saigon, 1930, pp. 25-26.
- (17) Son Nam, *op. cit.*, p. 282.
- (18) Centre des Archives d'Outre-Mer フランス海外植民地公文書館〔CAOM と略〕, GGI 876.
- (19) 国有地払い下げ制度については、高田洋子「20世紀初頭のメコン・デルタにおける国有地払い下げと水田開発」『東南アジア研究』22巻3号、1984年を参照されたい。
- (20) Societe (La) des Etudes Indo-Chinoises, *op. cit.*, p. 33. 1901年のカントー省の民族別人口構成(総人口22万6,798人)は、フランス人60人、フランス人の混血4人、その他ヨーロッパ人2人、その混血5人、アンナン人(ベト族)19万7,459人、ミンフォン(中国人混血)3,326人、中国人5,542人、クメール人(カンボジア)2万409人、インド人42人、日本人2人であった (*Ibid.*, p. 33)。
- (21) 1gia は40 litres。粃の水分含有率により異なるが、16~24kg。平均20kg。
- (22) テュウ政権期の農地改革の影響をカントー省 Chau Thanh 県 Phu Thu 村で調査した Callison は、当時デルタ西部で行われていた2回移植について、その理由を次の3点から説明している。(1) 雑草対策(雑草を駆除するために1回目は後に洪水を受ける低田に移植し、2回目はより高い田に植え直す)、(2) 水の制御対策(水の制御を行いやすい狭い場所、安全かつ効果的に丈夫な苗を生育させるため)、(3) 成長の制御(土壌の窒素分が豊富なために葉が育ちすぎるのを押さえて、稲穂の充実を促進するため) (Charles Stuart Callison, *Land-to-the-Tiller in the Mekong Delta; Economic, Social and Political Effects of Land Reform in Four Villages of South Vietnam*, Center for South and Southeast Asia Studies, University of California, Berkeley, California, 1983, p. 274)。